

## M-1 東松島市矢本大曲浜地区 2012年1月28日(土)

---

報告者名	岡田 浩樹	被調査者生年	① 生年未確認、② 生年未確認、③ 74才、④ 76才
調査者名	岡田 浩樹	被調査者属性	① 大曲浜獅子保存会会長・在宅介護サービス会社代表取締役、② 大曲浜獅子保存会副会長・仮設住宅自治会会長、④ 矢本在住。防衛庁の用地移転対象地になり、震災1年前に矢本市内に移転。齋太郎節の数少ない歌い手。
補助調査者	岡山 卓矢		

---

震災時、ディケアサービス会社の仕事で外にいた。震災の時に従業員の安否確認、そして顧客である高齢者の状況把握（大曲浜在住、出身者の高齢者も多い）に追われた。家族は後になったが、母親が津波にのまれた。自宅は全壊だが、その周囲の家が土台ごと根こそぎもってかかっているのにも関わらず、自分の家だけは1階の基礎部分と2階が残った。母親は1階にいて津波にさらわれたらしい。このように残ったのは、数年前にリフォームをしたからだと思うが、今後大曲浜は放棄されるので、今（1月末）段階でもこうやって瓦礫や船が撤去されずに残っている（1月31日にうちあげられた大型船舶は撤去）

→現場での旧大曲浜のかつての状況と被災状況の説明。

・大曲浜自体は仮設住宅の住民を中心に、矢本にまるごと移転する方向で話が進んでいる。しかし、他へ移り住んでいく者も多いだろう。保存会は今後若者が担うと同時に、浜を離れてしまうので、県や国の無形文化財に指定されると、今後も獅子舞を続けていくことの基盤にもなるし、また学校などで公演し、子供に教えることもやりやすくなるので、そこのところ希望する。自分たちと他のところの保存会の違いは、外を意識していること。副会長が市役所つとめなので、そういう所は心得ていて、今も外からの取材や応接の窓口になっている。意図的にメディアにも出て、大曲獅子舞の良さを知ってもらおうとともに、外に出た住民にも思い出してもらい、行事にまた来てもらうなどの努力をしている。

### メディアを通した獅子舞の復活

震災後の一連の獅子舞の復活についてはテレビの取材を受け、ドキュメンタリーでBSフジ（10・24）で放送され、東北放送でも12月2日に放送された。またもう一度放送する予定である（3月3日BSフジ「夢の食卓」でわかめ漁の復活を中心に番組構成）

→今回の調査では、TVプロダクション（うるるん旅行記の企画・取材プロデューサーとカメラマンが今回の調査でかなり同行）。そうした縁で石川さゆりの被災者支援CD録音（盆踊り歌）で、父親や話者④など5名の齋太郎節の歌い手が東京の録音に参加した。イントロで歌っている。

ともかく情報とモノが不足し、浜は全部やられたので、まずは搜索に追われた。

大曲地区の住民は矢本運動公園とグリーントウン矢本の被災者住宅に分かれて住んでいるが、中には個人のおついでで住宅に住んでいる者もいる（会長宅）。すでに3分の1は市外に出たかもしれない。

（東松島市大塩緑が丘、グリーントウンもとや②&③仮設住宅自治会（入居者300戸、750名）

獅子舞に関するほとんどの資料や、道具（獅子、はっぴ、太鼓など）もほとんど津波で流されたが、獅子舞の保存会の記録については一部水をかぶったものの、読み取れる形で書き置きが見つかった。日本財団の助成を受けて獅子人間文化財？の人につくってもらったが、やはり違う。目や顔つきがこっちで作ったものと違う。この獅子は東京で公演するときに使うことになっている。太鼓は玉造神社に置いてあったが、神社も流され、まったく別のところで見つかった。はっぴなどを財団の助成で作ったことは大きい。

今の獅子舞保存会の仮事務所（矢本市内）は普段は誰も住んでいないが、ここに獅子頭、太鼓やはっぴなどを置いてあり、また前後打ち合わせなどや行事の前に集まったり、ちょっとした飲み会はできる。ただし普通の家なので、いつまでもいるわけにいかない。

練習は別の場所で行っている。

### 生業（漁業）の変遷と獅子舞（保存会結成以前）

50年前は、トロール、ケーソン漁が盛んで大曲の漁師は豊かだった。漁場はこの付近だけでなく、津軽や北海道まで出漁した。当時は獅子舞は正月明けの大きな行事で、家々は障子や戸を開け、縁側に塩をまいて待っていた。獅子舞は家の中でも舞うのだが、皆酒を飲んでいるし、へたすると、戸や障子をぶち抜いたり、壊すこともあった。獅子舞でもっとも力があるのは獅子を持ち上げる時に人を持ち上げる役で、こうした者は厄年や婿で来た者が力試しや、厄払いなどの目的でなった。一軒あたり、30分、20名から30名がやってくるのだから、ものすごく賑やかだった。やってきた者にはオショマツ（ふるまい）でもてなした。オショマツの内容は刺身や魚、きんぴらごぼうなど。

当時、若者は飯炊きから入り、漁を覚えると、徐々に役が上がった。船主は別にいて、大曲の者は当初は大曲の船主の船で働いたが、やがてトロールが禁止され、遠くに出るようになると、他所の船に乗るようになり、北海道（根室根拠地）の鮭（ケーソン）だと、あちらこちらのものと一緒に仕事をした。遠くに行けば行くほど、浜に戻るのは正月くらいしかなくなってくる。その当時がやはり故郷に帰ってきたというので獅子舞がもっとも盛んだった時期ではないか（昭和30年代：現会長はその当時には生まれていない）

### 村の組織と相互扶助

大曲は30組に分かれていた。震災前は浜区の委員会と漁協が中心。またかつて3軒一組で組になって葬式など、助け合った。契約講は14組あったが、近年解散が相次いでいた。講長と会計、監査。獅子舞も契約講式でやっていて、暮れの20日に総会が行われ、講長が引き継がれた。

新しい講長は獅子を床の間に飾り、「宿わたし」をする。

\*今は8月の13日に総会。

## 漁業に関するタブー

へびと言ってはならない。「ながもの」という。船神（オフナダさま）を祭った。やはり女性特に生理中の女性や妊娠中の女性は近づいてはならなかった。

## 生業の変化と獅子舞いの衰退

大曲浜の獅子舞は、かつては（昭和30年代まで）休漁期の若者が正月の1月20日に行う行事として盛んに行われていた。正月の行事は家々でして、一呼吸置いての行事。家々を訪ね、振る舞いを受けながら、酒を飲みつつ、次の家へ向かう。人によってはそこで腰を落ち着けて飲むものもあり、入れ替わり立ち替わりで、近所や知り合いが舞うことすらあった。舞い方は一応の型はあったが、舞手によって自由で、まずは勢い（勇壮さ）が好まれた。血気盛んな若い衆の行事だったので、喧嘩や少しの不作法も許される「無礼講」であった。時には知り合いのつてをたどって、「やくざ」が獅子舞に加わることもあり、問題にもなった。特に練習をすると言うより、小さいときから毎年見聞きしたり、やっているうちに自然と覚えていった。齋太郎節は飲み会になると必ず唄われるので、獅子舞以外にも特に青年団などの集まりの中で覚えていった。

### 第1の転換期

昭和40年代には漁業が衰退傾向に向かうとともに、若者は浜の外に働きに行くようになった。とともに、石巻などにつとめに行く者も増えた。このため、漁業暦・村の年中行事と生活の間に乖離が生まれ、1950年代には獅子舞いは次第に停滞、形骸化しかかっていた。ところが第一の大きな転換は、昭和32年の東北博覧会。そこに出ることになり、少しはきちんとということ、練習などもしたそれから学校の行事などにも出るようになり、テレビに出演するようになった。この受け皿として愛好会、同好会が大きな役割を果たす。

昭和48年に愛好会が発足。昭和54年に保存会になった。地区住民だけで構成。

初代会長は熱海吉郎。会長の父親は3代目の会長。保存会の構成は世代がかなり影響している。70代はかつて大曲浜が漁業で栄えた時期の獅子舞を担った世代。その後漁業が低調になっていくにつれて、世代交代がうまく進まず、再び停滞し、その後現在の体制になって再び活動が活発になりかかったところで震災を迎える。

### 第2の転換期

大曲浜の獅子舞は震災後活発に活動しているが、その中心は、40代の会長、副会長である。この2人は、会長が前職がトラックの長距離運転手で現在は訪問ディ・ケアの会社社長。副会長は市役所勤務である。この2人は高校の先輩後輩で、若者を集め、一度停滞した同好会を震災前に「復活させ」た。この際に大幅な世代交代を進め、「きちんとした長老」から教えを受けつつ、実際には保存会として、地域住民のために、地域住民のシンボルとして再々出発がはかられ、現在にいたる。これが第2の転換期。

今の中核を占める30代の役員は中学校の時の文化祭で獅子舞をするようになり、そのメンバーを中核に立て直した。主な行事は正月の獅子舞と結婚式などの披露宴で舞う。最近は知り合

いから祝いの席に招かれることも多い。

自動車中古販売会社の創立 10 周年の際に公演（1 月 28 日）。この際には、獅子舞だけでなく、主に会員の子供（女の子が中心）が舞いをまった。開催者からの祝儀、出席者の祝儀、そして主食が振る舞われる。

獅子舞だけでなく、齋太郎節、さらには子供の舞いもセットにしてやっている。この子たちは、16-7 年前から獅子舞いを中学校で教え始めたが（中学校全体ではなく、公民館で大曲浜の子供を対象に）、やはり今の時代を考えると女子の部分があった方がよいので、加えるようになったことを引き継いでいる。

## 食生活

なかじ焼き：ひじきを油で揚げて、小麦、砂糖、塩で味付けした卵焼き。浅蜷を入れたりもした。故郷の味と言えば、海苔。

## 齋太郎節

現在の 70 歳以上は青年団やいろいろな飲み会で歌うのでそれで覚えた。唄ったのは浜甚句やソーラン節（後に北海道への出漁も増えたので）そしてタントウ節。齋太郎節は浜甚句を基調にしているが、基本的な節や拍子は同じだが、即興で唄うのが基本だった。名人という歌い手はいない。どこが違うとは言いが、声だけじゃなくて、歌詞や節回しなど微妙に普通の歌い手と違う。「味がある」「味がない」というのが評判になる。